急性中耳炎ニ關スル小統計

Dr. Joji Eda: Kleine Statistik über akute Mittelohrentzündung.

東京帝國大學附屬醫院分院耳鼻咽喉科 (主任 颯田琴次)

朶
エダ

讓
ジョウ

治
ジ

緒

言

本統計ハ急性中耳炎ニ對シテ、採リツ、アル臨牀上ノ態度ニ就テノ自己檢討ノ意圖ヲ始メタモノデアルガ、其内ノ一部ヲ茲ニ公ニスルノハ、若シ夫レガ、一般ニ今尙ホ決定サレテキナイ臨牀上ノ問題ノ解決ニ對シ、多少參考トモナレバ望外ト思ツテノ上デアル。蓋シ統計ハ資料ノ多數ナ事ヲ貴重トスル。又異ナツタ立場カラ集メタモノヲ對照スル事モ必要デアル。併シ之レハ一臨牀、一病院ニ於ケルモノ、ミカラハ期シテ得ラレナイ。發表ニ當ツテ、大方ノ御批判ト同時ニ、同種ノ報告ノ御追加ヲ望ム次第デアル。茲ニ急性中耳炎トシテ扱ツタモノハ、一般ノ急性中耳炎ノ他ニ、慢性症ノ急性増悪症ヲモ含ム。但シ假性眞珠腫ノ有ツタモノハ除外シタ。又例數ハ總テ一例トシテアル。項ヲ分ケテ6トシ、頻度、發病ノ季節、(殊ニ其年齡トノ關係)、初期ノ鼓膜切開ニ關スル項、乳嘴突起繫開ニ關シテ、又頭蓋内合併症及ビ

「ズルフォナミド」劑ノ治療効果ニ關スルモノ等ニ就キ記述スル。

1. 急性中耳炎ノ頻度 (昭和8年カラ14年迄)。

外來患者總數ニ對スル急性中耳炎例數ヲ見ルト。

年 度	8	9	10	11	12	13	14	計
外 來 者	2724	2750	2617	2456	2509	2648	2911	18015
急 性 中 耳 炎	307	418	358	358	367	455	395	2658
比率%	12.7	15.2	13.5	14.6	14.6	17.2	13.5	14.7

即チ昭和8年デハ急性中耳炎數及ビ比率共ニ最小、13年ニ於テハ數、比率共ニ最大ヲ示シテキル。

2. 發病ノ季節

昭和8年カラ14年迄ノ總例數ヲ月別ニ見ルト。

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
例 數	396	409	384	326	230	128	92	177	85	131	184	254
總計ニ對スル比%	14.1	14.7	13.7	11.6	8.2	4.6	3.3	6.4	3.1	4.7	6.4	9.1

即チ2月前後ト8月トニ山ガ出來ル。前ノ山ハ感冒ト關係ガアルト言ハレテキル。後ノ山ハ小

サイモノデアルガ、水泳ガ原因デアラウト言フ人ガアル。之ヲ試ニ年齡別ニ分ケ各月ヘノ分布

見ルト。

年 齡	總 數	月											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 以下	333	11.2	12.0	13.2	10.5	7.8	1.7	2.1	4.8	2.4	4.2	10.5	13.4
2—5	756	13.2	13.4	16.7	15.5	10.1	5.3	1.6	2.3	0.9	3.4	6.9	10.2
6—10	542	13.7	20.5	13.7	13.6	8.5	3.3	3.1	4.6	1.6	3.3	5.3	8.3
11—15	190	7.4	12.6	7.4	4.7	8.9	6.8	11.1	19.4	5.2	3.6	8.0	6.8
16—20	223	15.6	9.8	15.9	10.3	4.5	4.7	5.8	10.5	5.8	6.2	4.7	6.2
21—30	341	14.1	13.2	12.9	9.7	7.6	5.5	2.6	8.2	6.7	5.8	6.0	7.6
31—40	197	9.6	13.7	9.6	11.7	6.7	9.1	4.6	8.1	6.7	10.7	3.0	6.7
41—50	104	27.9	13.9	14.0	9.8	8.7	8.9	1.7	6.8	0	3.8	4.0	7.8
50以上	110	20.9	2.0	15.5	4.5	1.4	0	1.3	9.5	1.8	6.4	7.3	10.0

比ヲ即チ8月ノ山ノ最モ著シイノハ11歳カラ16歳迄デ、16歳カラ30歳ノ邊ガ之ニ次グ事ガ判リ、水泳ノ影響ノ有力ナ事モ察ヒラレルガ、水泳＝關係ノナイ様ナ他ノ總テノ年齢＝於テモ、例外ナク8月＝山ノ出來テキル事ハ、何カ他＝モ原因ガアルノデハナイカト想像サレル。此統計＝於テハ、原因ノ検査ヲシテキナイノデ、其點ハ不明デアル。

3. 鼓膜切開ニ關シテ

鼓膜切開ノ適示トシテ、急性中耳炎ノ初期＝ハ、發熱、耳痛、鼓膜膨隆ガ舉ゲラレテキルガ、實際＝常ツテハ人＝依リ、判斷ノ差ガ可成

アルモノ、様デアル。

昭和10年カラ14年ノ5年間＝穿孔性中耳炎デ入院シタモノ＝就キ、切開ノ行ハレタモノ（之ハ他院デ行ハレタモノモ含ム）ト、自然穿孔ヲシタモノヲ檢ベルト、夫々183例、202例デアッタ（自然穿孔後、必要ト認メラレテ切開ヲサレタモノハ除外シテアル）。此各々＝就テ治療日數ノ分布ヲ見ルト次ノ如クデアル（下記表テ不治ト言フノハ、第120病日以上迄通院シテキテ、其後不治ノ儘來院シナクナツタモノデアリ、他院カラ廻ツテ來タモノモ含ム）。

治療日數	1—7	—14	—21	—28	—35	—42	—49	—56	—100	100以上	手術	不治	死
切開(%)	3.3	12.0	12.6	5.4	7.6	6.6	5.4	3.3	7.1	2.7	33.9	0.5	1.1
自然穿孔(%)	5.9	5.5	12.4	7.4	10.9	6.5	6.5	1.5	2.4	0.5	37.6	1.5	1.0

此表デハ兩者ノ間＝著シイ差ハ見出シ難イノデ

アルガ之＝尙ホ鼓膜切開ノ時期ヲ考慮スルト。

切開ノ時期 病日													
1 (44例)	4.5	11.4	22.7	6.8	4.5	4.5	6.8	2.2	6.8	0	27.2	22.2	0
2 (48例)	4.1	10.4	12.5	0	8.3	4.1	8.3	0	4.1	4.1	41.7	0	0
3 (24例)	4.1	16.6	4.1	8.3	8.3	0	0	8.3	4.1	4.1	41.7	0	0
4 (22例)		22.3	4.4	4.4	0	8.3	0	0	13.2	8.3	31.1	0	4.4
5—10 (20例)		5.0	15.0	15.0	15.0	15.0	10.0	0	0	0	20.0	0	0

(病日ハ患者乃至其家族ノ訴カラ推量シテアル)

全數ガ少イノデ嚴密ナ事ハ言ヘナイガ、傾向トシテハ第1病日＝施シタモノデハ手術例ガ少ク、早く治ツテキルモノモ多イ。

之等＝依テ、鼓膜切開ノ問題ヲ考察シヨウトスルナラバ、次ノ點ヲ顧慮スル必要ガアラウ。即チ切開ヲ行ハレタモノ、中ニハ、切開ヲ行ハズ

トモ治ツタ(即チ非穿孔的＝經過シタ)モノモア
ツタト思ハレル＝反シ。穿孔セズ＝治癒シタモ
ノハ此統計ノ中＝入ツテキナイ事デアル。

試＝當院＝於テ上記5年間＝扱ツタモノデ。來
院當時穿孔ノ無カツタモノヲ選ブト(入院。外
來ヲ併セテ)626例。此中

當院デ切開セルモノ 67例

切開セズ＝自然穿孔セルモノ 28例

非穿孔性＝治癒シタモノ 373例
後ノ158例ハ全治＝至ル迄通院シナカツタモノ
デアルガ。之ハ概ネ輕ク濟ンダモノト想像サレ

ル。此373例ノ治癒状態ヲ見ルノミ。發熱。耳
痛。鼓膜膨隆ノ存否ヲ顧慮シテ。8群＝分ケタ
(全例＝於テ鼓膜ノ充血ハ認メラレテキル)。發
熱ハ37°以上ノ記載ノアツタモノデアルガ。之
ハ急性中耳炎ノミガ唯一ノ原因デアツタトハ斷
定シ得ナイ。又來院時ノ計測ノ正確カ否カハ別
問題トシテ。來院時＝無熱デアツテモ。發病當時
ノ體溫ガ必ズシモ正常デアツタトハ限ラナイ。
次＝耳痛ハ訴＝依ルモノデアルカラ。幼兒＝於
テハ。之ガ記載サレナイモノガ多イ事ヲ思ハネ
バナラナイ。

治癒日數	1—7	—14	—21	—28	—35	—42	—49	計
發赤ノミ	72	58	25	19	6	3	0	183
耳痛	47	28	6	3	2	0	0	86
發熱	7	2	2	2	1	1	0	15
膨隆	3	5	4	2	1	0	0	15
痛＋熱	9	5	5	1	0	0	0	20
痛＋膨	11	8	2	4	2	0	0	27
熱＋膨	4	7	1	0	0	0	0	12
痛＋熱＋膨	8	6	1	0	0	0	1	16
計	161	119	48	31	12	4	1	
%	43.2	31.9	12.8	8.3	3.2	1.1	0.3	

當院＝於テ初期＝切開ヲ受ケタモノハ。勿論
痛。熱。膨隆ノ三主徴候ヲ具ヘタモノ、ミデハナ
イガ。之等ヲ兼ネテキテモ尙ホ且ツ保存的＝輕
ク治癒スルモノガアル事ハ。上表ノ如クデアル。
尙ホ幼兒＝於テハ。非穿孔性ノモノハ。中耳炎
ト氣付カレズニ。其儘治癒スル事ガアラウ。

之＝依テ鼓膜切開ヲ無用トスルノハ。併シ尙ホ
早斷デアル。後遺症ノ多少。聽力障害ノ存續如何
等モ考慮シタナラバ。更ニ檢討スベキ道ガ幾
多アル筈デアル。

4. 乳嘴突起鑿開ニ關シテ

乳嘴突起鑿開＝就テハ。是亦諸家ノ間＝幾多
ノ見解ノ相違ガアル様デアルガ。其問題ハ措ク

事トシテ。唯當院ノ統計ヲ掲ゲルト。

昭和8—14年間＝行ツタ乳嘴突起鑿開例數ハ

年	8	9	10	11	12	13	14	計
例	20	18	22	36	46	22	30	194
急性中耳炎例	307	418	358	358	367	455	395	2796

即チ急性中耳炎例數＝對シテ7ケ年ヲ通計スル
ト。約7%ノ手術率ト云フ事ニナル。同様ナ發
表ヲ他＝求メルト。慶應大學10ケ年ノ平均ガ約
20%(1108:5757)。長崎大學ノ3ケ年ノ調査デ
ハ約16%(80:505)ト云フ事デアル。

手術ノ時期ヲ病日＝依テ見ルト(昭和10—14年
デ病日ノ明カナモノ154例＝就テ)。

病日	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週	第6週	第7.8週	ソレ以後
例	21	23	33	16	24	10	10	17
%	13.6	14.8	21.4	10.4	15.6	6.8	6.8	10.8

Hoptein が古ク發表シタモノニ依ルト、手術シタ乳嘴突起炎 289 例ノ手術期ヲ見ルト、第 1 週=23 例(7.9%)、第 2, 3 週=87 例(30%)、ソレ以後=残りノ 179 例(62.1%)トナツテキル。但シ此臨牀デハ急性中耳炎デノ入院數ガ、此期間中=686 例デアツタト云フカラ、全急性中耳炎數ハ判ラナイガ、相當高率ト思ハレル(因ニ上記期間中ノ當院ニ於ケル急性中耳炎入院例數ハ 648 デアツタ)、本邦デハ、手術數ノ比率ト、時期トヲ同一臨牀デ發表サレタモノガ見當ラナイガ、藤田ニ依レバ、乳嘴突起炎ノ症狀ノ臨牀的ニ出ルモノハ、時期ニ依ル分類ハ次ノ如クデアルト。

		1W-	2W-	3W-	4W-	1M-	2M-	計
全體	{例	38	37	29	39	24	36	203
	{%	18.7	18.2	14.3	18.9	11.8	17.8	
手術シタモノ	{例	24	30	24	35	18	36	167
	{%	14.3	18.0	14.3	20.9	10.8	21.6	

即チ當院ノ統計ヲ他ノ夫レト比較スルト、手術例ノ率ハ低ク、其代リ第 1 週ニ行ツタモノハ、比が大キイ様デアル。嚴密ニハ同一臨牀カラノ此二ツノ統計ト比べルベキデアルガ、之ヲ無視スレバ、當院デハ病日第 4 週以後ノモノニ於テ、保存的療法ヲ續ケルモノガ多ク、ソレニ依テ手術例ガ少クナルノデハナイカト想像サレル。次ニ手術後ノ治癒日數デアルガ、之ハ手術法、後處置如何ニ依テ左右サレヤウ。當院デハ所謂完全ナ乳嘴突起部蜂窠系ノ搔爬ヲ目的トシ、更ニ Attikoantrotomie ノ形ニ進ンデキル。後處置ハ開放デ行フ。斯クシテ得タ創面閉鎖日數ヲ其明カナモノ、昭和 10 年カラ 14 年迄ノ 104 例ニ就テ、年齢別ニ平均ヲトルト、

年齢	0-2	3-5	6-10	11-15	16-20	21-50	50 以上
例數	11	16	25	9	9	25	9
平均日數	57	126	107	97	114	115	130

幼兒ニ於テ早イノハ、創面ノ小サイ事ニモ依ラウガ、蜂窠ヲ廣ク搔爬シ、創が大トナツテモ、必ズシモ永クナラヌ様デアル。何故ナレバ、搔爬ノ益ニ廣クナリツ、アル最近 2 年ノ治癒日數ガ、却ツテ短縮サレテキルカラデアル。即チ

例數	8	4	7	5	4	13	2
平均日數	57	90	84	69	105	93	94

併シ、之ヲ搔爬ヲ廣クシタ爲、治癒ガ早クナツタト直チニ決論スルノモ早計デアル。寧ロ之ハ後處置ノ差ニ歸スルモノト考ヘテキル。

5. 頭蓋内合併症ニ關シテ

昭和 8 年カラ 14 年迄ノ 7 年間ニ、急性中耳炎ニ於テ證明セラレタ頭蓋内合併症ハ次ノ如クデアル。

	硬腦膜外膿瘍	竇周膿炎	竇血栓敗血症	迷路炎	腦膜炎	腦膿瘍	計
例	2	10	5	2	10	3	32
死亡	0	0	2	1	6	3	12

敗血症ノ 1 例ハ竇血栓ヲ證明出來ナカツタモノデ治癒シ、他ノ 1 例ハ竇血栓カラ來タモノデ死亡シタ。迷路炎ノ治癒例ハ迷路刺激症狀ト、瘻孔トヲ認メタモノデ、其死亡例ハ腦膜炎死亡例ノト共通デアル。竇血栓ノ治癒 2 例ハ潜在性ノモノデ、器質化シツ、アツタ。

以上頭蓋内合併症ノ總數 32 ハ此間ノ全急性中耳炎數 2658 例ニ對シテハ 1.2%ニ當ル。同様ノ統計ガ他ニ見當ラナイノデアルガ、木村ハ頭蓋内合併症ト乳嘴突起炎トノ比ハ 100:347、乳嘴突起炎ト急性中耳炎トノ比ハ 91:586 ト云フカラ、之カラ推スト 4.4%トナリ、田中ハ硬腦膜外膿瘍、硬腦膜炎ヲ除イテ、全中耳炎ニ對スル頭蓋内合併症ノ割合ハ 1.6%ト發表シテキル。故ニ當院ニ於ケル割合ハ他ヨリ決シテ高率デナイト云フ事ハ確信シ得ヤウ。

前節＝於テ當院デハ第4週以後ノ手術ヲ延バス
傾向＝アル事ガ想像サレタノデアアルガ、夫ニ依
テ必ズシモ頭蓋内合併症ガ多發シタトハ言ヘナ
イ様デアアル。

6. 「ズルフォンアミド」劑ト急性中耳炎

治癒日數

「ズルフォンアミド」劑ガ急性中耳炎ノ治癒＝
如何ニ影響スルカラ知ル爲ニ、此統計ヲ出シテ
見タ。當院デ用ヒタモノハ、主トシテ内服的＝
(注射モ少數例＝施ス)「ゲリゾン」、「テラボー

ル」デアリ、他＝「アルバジル」、「ルヂール」、
「プロントジル」等ガ時々試ミラレタ。

先ヅ本劑ガ現ハレテカラ、急性中耳炎ノ経過ガ
一般＝良クナツタト云フ事ヲ時ニ耳ニシタノ
デ、當院デ未ダソレヲ使用シナカツタ頃ノ5年
間(昭和8年カラ12年)ト、使用シ始メテカラ
ノ2年半(昭和13年カラ15年6月迄)ト＝於ケ
ル治癒狀態ヲ比ベルト、経過不明ノ1149例ヲ
除イテ、外來患者＝就テ、前者733、後者527例
ノ分布ハ、

治癒日數	1—7	—14	—21	—28	—35	—42	—49	—56	—100	100 以上	不治
前 (%)	15	26	19	12	8	5	3	3	7	1	10
後 (%)	21	24	16	11	8	5	2	3	5	2	6

入院患者＝就テ前者402、後者206例ノ分布ハ、

治癒日數	1—7	—14	—21	—28	—35	—42	—49	—56	—100	100 以上	不治	手術
前 (%)	5	13	11	8	7	5	4	2	5	0	2	37
後 (%)	8	11	12	8	10	7	3	2	4	1	1	30

即チ本劑ガ出現シテカラ、急性中耳炎ノ経過ガ
著シク良クナツタト云フ事ハ出來ナイ。
ソコデ更ニ後ノ2年半中ニ來院シ、30病日以内

ニ治療ヲ開始シタモノ＝就キ、之ヲ本劑使用例
188例ト、非使用例468ニ分ケテ、夫々治癒狀
態ヲ見ルト。

治癒日數	1—7	—14	—21	—28	—35	—42	—49	—56	—100	100 以上	不治	手術	死
使用例 (%)	10.7	20.8	13.8	15.5	12.3	7.7	3.1	1.5	4.1	1.5	1.0	7.9	0.5
不使用例 (%)	21.6	24.4	17.4	9.1	6.9	5.8	2.6	1.7	2.4	0	3.4	4.3	0.4

之＝依テモ、治癒日數短縮ヲ證明出來ナイ。
次＝使用量ヲ顧慮シテ、1日量10歳以上デ1g、
10歳未満デ0.5gニ達シナイモノ、或ハ投藥
3日以内デ中止シタモノヲ小量群トシ、ソレ以

上ヲ大量群トシテ、不使用群ト比較シタモノ
ハ、次ノ如クデアル(第10病日以内ニ治療ヲ開
始シタモノヲ選ブ、13年カラ15年6月迄)。

大量群 (54 例)	20.4	27.8	24.7	9.3	9.3	1.6	1.6	0	1.6	0	0	10.9	0
小量群 (81 例)	12.4	27.6	12.4	16.1	9.9	4.9	2.4	4.2	8.4	0	0	2.4	0
不使用 (389 例)	25.9	29.0	16.2	8.5	4.9	4.4	1.5	1.3	2.9	0	2.9	2.9	0

大量群＝於テハ、小量群＝比シ第3週迄ニ治癒
シテキルモノガ多イ傾向ニ見エルガ、不使用例

モ亦同様デアリ、量ノ影響ト斷言シ得ナイ。
次＝使用ノ開始期ヲ考慮シテ見ルト。

投薬 開始	治癒 日数 例	1—7	—14	—21	—28	—35	—42	—49	—56	—100	100 以上	不治	手術
2病日以内	(48)	39.1	32.6	6.5	6.5	6.5	6.5	0	0	2.2	0	0	2.2
4 "	(29)	6.9	37.9	24.2	13.7	6.9	0	0	0	6.9	0	0	3.4
6 "	(15)	0	20.0	26.7	40.0	0	0	0	6.7	0	0	0	6.7
8 "	(24)		29.1	20.8	12.5	25.0	4.2	0	0	0	4.2	0	4.2
14 "	(30)		6.7	16.7	23.3	20.0	6.7	6.7	0	10.0	0	0	10.0

此對照トシテ、第2, 4, 6, 8, 14病日以内＝來院。

本劑ヲ用ヒズ＝治療セラレタモノヲ見ルト。

治療開始	(例数)												
2 病日以内	(197)	37.1	25.4	15.2	6.1	5.0	2.5	0.5	1.0	3.6	0	1.5	1.0
4 〃	(89)	25.6	32.2	12.2	7.8	4.4	3.3	1.1	3.3	3.3	0	2.2	2.2
6 〃	(32)	9.1	42.5	25.0	0	12.5	0	6.3	0	3.1	0	0	6.3
8 〃	(54)		33.3	18.5	18.5	1.9	13.0	1.9	0	5.6	0	5.6	7.5
14 〃	(34)		11.8	32.3	10.3	8.8	8.8	5.9	0	0	0	5.9	5.9

之＝依テ見ルト、不治ノ項＝入ルモノハ、本劑投與群＝ハ無カツタノデアルガ、100 日以上乃至手術例ヲ綜合シテ見ルト、必ズシモ良成績トハ言ヒ難イ。

更＝考ヘレバ、本劑ガ起炎菌＝依テ、其効果＝

差ヲ示スデアラウ事ハ想像サレル。併シ起炎菌ノ決定ハ、仲々容易デナイ。茲＝連鎖狀球菌ノ檢出サレタモノ＝就テノ小統計ヲトルド、次ノ如クデアル(「ムコーズス」ヲ除ク)。

治癒日数	1—7	—14	—21	—28	—35	—42	—49	—56	—100	100 以上	不治	手術
使用例 (40例)	7.5	7.5	17.5	12.5	5.0	10.0	7.5	2.5	7.5	2.5	2.5	25.0
不使用例 (40例)	10.0	7.5	7.5	10.0	5.0	7.5	17.5	5.0	0	0	2.5	25.0

但シ之ハ他ノ種ノ菌ノ無カツタモノ許リデハナイ。ガ少クモ之デハ尙ホ効果ヲ云々スルニ至ラナイ。尙ホ入院例デ「ムコーズス」ノ檢出サレタモノハ全例結局手術＝終ツテキル。

以上ノ結果ハ本劑ノ効果ヲ否定スルモノデハナイガ、唯効果ヲ證明出來ナカツタト云フ迄デアル。

本統計ハ、初メカラ本劑ノ効果ノ試験ヲ志シテノ結果デハナイノデ、何レカト言ヘバ、重症ト思ハレルモノ＝本劑ヲ用ヒテキタ傾向ガアル。又不使用例トシタ中＝ハ、當院＝來ル前＝既＝

本劑ヲ自宅、乃至他院デ使用セラレテキタモノモアルカモ知レナイ(但シ發病直後＝當院＝來タモノハ、多分其懸念ハナイデアラウガ)。之等統計資料ノ不備ヲ一應考ヘル要ハアルデアラウ。更＝藥劑ノ効果ヲ、斯カル方面カラノミ批判スル事モ必ズシモ妥當トハ言ヘナイ。例ヘバ合併症ノ多少ト云フ様ナ事ヲ顧慮シタナラバ、又別ナ統計ガ出ヤウ。之等ノ事ハ統計資料ノ數的不足ト相俟ツテ、本劑ノ急性中耳炎＝對スル効果ノ批判ヲ尙ホ後日＝遺ス事トナル。

結

(1) 昭和8年カラ14年迄ノ急性中耳炎ノ外來患者＝對スル頻度ハ、昭和13年＝最大17.2%、8年デハ最小12.7%ヲ示シタ。

(2) 此7年間ヲ通ジテ見ルト、2月ヲ中心トシテ最モ多イガ、8月＝亦其前後ヨリ多クナル。後者ハ年齢トノ關係ヲ見ルト、水泳ガ有力ナ原因ト考ヘラレルガ、他ニモ原因ガアラウト想像サレル。

(3) 初期ノ鼓膜切開ノ普通ノ適示トシテ、發熱、耳痛、鼓膜膨隆ガ擧ゲラレルガ、此中2乃至3ヲ兼ネテキテモ、保存的＝非穿孔的＝治療シタ例ガ可成アル。然モ夫レハ比較的短時日デアルガ、唯此場合鼓膜切開ヲシタナラバ、尙ホ早ク癒ツタカ否カハ、對照スベキ統計ガナイ

論

ノデ不明デアル。

(4) 乳嘴突起鑿開例ハ、當院＝於テハ全急性中耳炎數ノ約6.9%＝當リ、少イ様デアル。之ハ第4週以後＝於テモ尙ホ保存的療法ヲ續ケル事ガ多イ故カト想像サレル。

(5) 頭蓋内合併症ハ全急性中耳炎數ノ約1.2%デアリ、低率ノ様デアル。第4週以後＝於テ保存的療法ヲ續ケテモ、尙ホ頭蓋内合併症ヲ必ズシモ多カラシメナイト思ハセル。

(6) 「ズルフォンアミド」劑ガ急性中耳炎ノ治愈日數ヲ短縮セシメルト云フ事ヲ證明スル事ハ出來ナカツタ。但シ之＝ハ尙ホ統計上ノ不備ガアル。

主 要 文 献

1) 村上眞：大阪醫事誌。第11卷、第4號、67頁。 2) 海江田純：耳喉。第2卷、841頁。 3) 木村謙次：内外治療。第8年、1225頁。 4) 田中文男：大日耳

鼻。第38卷、595頁。 5) 藤田：大日耳鼻。第42卷、1400頁。 6) Hopstein: Mschr. f. Ohr. usw. 63 J-S. 30.

(原稿到着＝昭和16・3・3)